



Robinson Jeffersの思想と詩について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 外山, 定男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000013

Robinson Jeffers の思想と詩について

外 山 定 男

Sadao Toyama : The Thought and Poetry of Robinson Jeffers.

ジェファズ (Robinson Jeffers, 1837, 1.10-) の詩を読んで誰しもが感ずることは、彼の思想が極めて暗く、否定的で、陰うつですらあるにかゝらず、彼の詩は極めて力強く、鞏固で、確信にみちて居ることであろう。この点はウンターマイヤー Untermyer, Louis も「詩人としてのジェファズと哲學者としてのジェファズとは重大な分裂が存在して居る。彼の哲學は negative で repitious で dismal であるにかゝらず、彼の詩は Positive as any creative expression must be 」と指摘して居る。(Louis Untermyer: Modern American poetry. Harcourt, Brace and Company, 1942, p. 405.)

思想的には彼はショウブンハウアやニイツェやスベングラの流れを汲む、殊に年少の時代にニイツェを読んだことは、彼の世界觀に決定的な影響を與えたものゝ如くである。例えば長詩悲劇の「彼方の塔」には、ニイツェの「悲劇の誕生」の King Midas の物語りが明らかに反映して居る。のみならず、この徹底した人生否定の思想は、くりかえしくりかえし彼の詩のなかに出て来る。全くホーレス・グレゴリ Horace Gregory も言うように「The great poet in him cannot get clear of Nietzsche's philosophy (A history of American poetry, 1900-1940. Harcourt, Brase and Company, 1946.407)である。

それでは彼の詩に感じられる不思議な迫力、人をその信念の世界に惹きつけずにはおかぬ eloquence は一体どこから生れたものであろう？ それに答えるものとして私は、The Collected Poems (Random House, 1933) に寄せられた彼自身の序文を取上げてみたい。

「その當時の近代フランス詩は」と彼は言う「そして英詩の最も新らしいものは、徹底的な敗北主義者であると私には思われた。まるで詩は散文にたいする恐怖にとりつかれ、その肉身を勝利者にさしけることによつて自らの魂を救おうと狂奔して居るみたいだ。そして、瘠せこけ、幻想的になり、抽象的になり、非現實的になり、奇矯になり、自らの魂を救うことが出来ずに居る。なぜならばこういう傾向自体が何ものよりも反詩的なものだからである。詩は實体と感覺、物質的な又心理的な現實性をとりもぎさねばならぬ。こういう感じが、その當時から私の心の底によこたわつて居たのである。そのことが私をして物語詩に向かしめ、主題を現實生活に選ばしめた。……………そして又哲學的な又科學的な觀念を表現することを。私は詩に新らしい分野を開拓しようとしたのではなく、古い自由を取戻そうとしたのである。」(Ibid. XIV)

この立論は明快である。ただ彼が“The modern French poetry of that time and the modern of the English poetry” と言うとき、特に詩人や詩派の名前をあげて居ないので、その點がいさゝか問題になるかと思うが、私の考では、恐らく第一次世界大戦後間もなくフランスに發生した、超現實主義、ダダイズム、キウビズム、未來派等の一群、並びにイギリスに於けるそれらの同調者、更にはエヅラ・パウンドの主唱したイマジズム、T. S. エリオットを指導者とする「詩は情緒及び個性からの逃避である。」と考える人々——これらの詩法の流れはこの極東の島國の詩人たちの上にも尠ならず影響を及ぼした——をさして居ると思う。それらの流派の全部を一口に論ずることは勿論出来ないが、そうしてその或るものは既に歴史的な存在になつてしまつたが、全体として言えば表現が極めて難解であり、抽象的であることだけは、ジェファズの指摘する通りである。これ

らの詩派のなかで、英國の詩の流れの主流をなすものと見做されて居る——その及ぼした影響の大きさによつて——（例えば現代英國の第一線の詩人であるオウデン、スペンダー等、又アメリカの新らしい詩の指導的な立場にあるマツクレイツシュ、ホーレス・グレゴリー等もその流れを汲んだものとされて居る）——エリオットの詩風もまた難解であることをまぬかれぬ。併し彼の詩の場合は、「彼は情緒と個性とからの逃避である。」という彼の有名な主張にもかかわらず透徹した世界観と信念とがちりばめられて居るのであるが。

この難解さということは近年多くの論議の對象となつたものであつて、讀者の場合から出たものは大概非難であつた。併しそれら所謂モダニストの詩人たちはそういう批判をしり目にかけて難解な詩を書きつゝけた。そういうことが近代詩人の特權であるかのように振舞つて來たのだつた。

純粹詩というような考方では、詩に於ける意味内容は全く棄て去られて、たゞ美しい^{いろど}表象をつくること、或はシンボルの世界といつたようなものを創り出そうとする試みが企てられた。これは讀者の理解を全然無視するもので、當然詩人を社會から遊離させ、詩そのものの領域を極端にせばめる傾向をもつものであつた。

ロバート・フロストのような、流行の世界からは全く離れて、己の路をひたすら歩んだ詩聖とも言うべき詩人も「近頃は詩の難易をもつて、その詩が優れて居るかどうかということをしめようとする風潮がある。つまりあまりわかり易い詩は、つまらないものとされ、又全然わからない詩も困るとされ、わかるどころとわかり悪いところが適宜にまぜ合わされたような詩が優れた詩だと評される傾向があるが、それは間違つて居る……難かしいかやさしいかと言うことは詩の優劣を決める要素ではない。それはメタファの問題である……。と彼の詩の選集で言つて居る。(The poem of Robert Frost. Random House. 1946. XV-XVI)

「詩は實體と感覺、物質的な又心理的な現實性をとり戻さねばならぬ……」と言うジェファズの言葉は、自らの選んだ方法の故にその立場を狭いものにしつゝあつた近代詩を、「昔の自由」の世界に解き放そうとする強い聲と言うことが出来るであろう。

「更にジェファズが「主題を現代生活からとつた、」と述べる時、その意味は、現代文明社會の生活ということではなくて、むしろそういう文明の桎梏にしばられて居ない、自由な^{びのび}のびした自然のまゝの世界であることも注目されなくてはならない

Poetry must deal with things that a reader two thousand years away could understand and be moved by. This exclude much of the circumstances of modern life, especially in cities. Fashion, forms of machinery, the more complex social, financial, political adjustments and so forth are all ephemeral, exceptional. They exist but never will exist again. Poetry must concern itself with (relatively) permanent things. These have poetical value; the ephemeral has only news value. (The selected poetry of Robinson Jeffers, Random House. 1938. pp.X-V-XV)

彼の言うように、現代生活から、その流行、機械の形式、又社會的、財政的、政治的な諸問題を差引いたら一体何が残るのであろう？彼のいわゆる人間生活の（比較的）永遠なものとは何であるか？それは本能的な世界、素朴な感情と意慾の世界に過ぎないのではないか。それは常識的な見方からすれば現代を盡くということゝ凡そ反對のことになるのではないか。

こういう世界はごとかD. H. ローレンスの原始生活への憧憬を思わしめるものがある。しかしローレンスの場合は全体の態度が逃避的であり、その古代讃仰は敗北主義の色彩が濃い、ジェファズの場合は、徹底した人間否定の思想から生れた積極性、鞏固さが感じられる。

彼の盡く現代の人間の群、例えば Roan Stallion に出て來るカリフォルニア、その亭主のジョン

Thro' Landing' に出て来るヘレン、リーヴ・サーソ、その老母等はみな強い性格と意志とをもち、終極の悲劇を避け難いものとして居る。しかもそれらの運命を嘆き悲しむことをせず昂然として耐えて行く、それらの人物は、彼の古代をあつかつた長詩 *The tower beyond tragedy* に出て来るオレステスやカサンドラと少しも異るところがない。まことに彼が言うように二千年の時の隔りはこれらの人間群の間には感じられない。

又彼はモンテレイ沿岸の山中で「偶像やサーガの時代、又はホーマーの時代と本質的には全く同じ営みをしている人々を見た。」と自ら言つて居る、そこに彼は「東の間のはかない附加物にさいかも毒されて居ない生活」を見出し、彼等は過去數千年間續けて来たと同じように、これからの數千年間も家畜を追い、鷗の群れ飛ぶ岬を耕して行くことであろう、と結んで居る。

時を超え、時代の影響を超えた人間性を凝視する彼が、アイルランドを訪れた時、Hill of New Grange の古蹟で、そこに葬られて居る時代の王に

「我が傍に来れば誰か？この虚しき丘のわが來れる誰か？

汝の發掘は無益だ。今より千年前、デンマーク人共が

我が黄金の腕輪を奪い去つてしまつた。海の彼方からの紅毛の者共が、炬火と劍とをもつた……」⁽¹⁾

と語りかけられ、

「親しき王よ、御身は腕輪よりも尊い寶をもつて居る

死せる者の平安は黄金よりも尊い。何人もそを御身より奮うことはならぬ」

と答えて長い物語りを王と試み、千年の昔の凄慘な人間の苦惱を叙し出して居るのは極めて自然な感じがする。

又同じ序文のなかで更に彼は言う。ニイツェの "The poet? The poet lies too much." という言葉聞いたのは彼が十九歳の時であつたが、それ以來彼の心にこびりついて離れず、それから十數年後に到つて、遂に詩のなかでは決して嘘言は用いないと決心した。

"Not to feign any emotion that I did not feel: not to pretend to believe in optimism or pessimism, or unreversible progress: not to say anything because it was popular or generally accepted or fashionable in intellectual circle unless I myself believe it; and not to believe easily." (Ibid. XV.) この、實際自分の感じた以外の情緒を空想的に拵え上げるよるなことを決してしないこと、知的なサークルの間で一般的に認められて居ようが流行つて居ようが、自分がこうと信じないかぎりは決して言わぬこと、更に容易にものを信じないこと。この一徹な精神こそ彼の詩に「人はそれを愛しようとはしないかも知れぬが、決して忘れることは出来ないであろう。」とウンターマイヤーをして言はしめた、凄慘な迫力を與えるものであろう。

註1) In the Hill at New Grange one of the three great prehistoric Burial Mounds on the River Boyne より引用 (The selected poems Robinson Jeffers, pp. 469—472)

2.

私がこゝに少しく詳細に検討を試みたいと思う「葦毛の種馬」Roan Stallion は、1925年、彼が38歳の時、第四番目の詩集として、Tamar 其他の詩篇と共に出版されたものである。この一作は彼に一躍 major poet の地位を與えたばかりでなく、"No narrative poem written by an American during the twentieth century is a better example of the classical rules of unity than Jeffer's "Roan and Stallion." と評家をして言わしめたのであつた。(Horace Gregory: A history of American poetry 1900-1940. Harcourt, Brace and Company. 1946, p.405)

この詩に着手する前、ギリシヤを題材とした *The Tower beyond Tragedy* を書き畢つた彼は、今度は現代生活に主題を求めようと計畫して居た。そして海崖のわきに建てつゝあつた彼の家のために、石切りの仕事に従事して居たある日のことである。一息入れるために、濡れた岩の上に腰を下して、折しも沈み行く夕日を眺め乍ら黙思して居た時、丘の上でかつて見た路さえついていない窪地のなかの廢屋がふと彼の心に浮んで來た。人に聞いた話では、其小屋の持主が種馬に殺されて以來、誰も棲む者がないのだということであつたが、その種馬と荒れ果てた家とが、くつきりと彼の腦裡に浮び上つて來た。ついで、人物としては、丘の上で屢々見かけたボロボロの二輪馬車を乗り廻して居たインデヤンの女とその白人の亭主とが浮んで來た。そして、彼が石切りの仕事のため再び立上つた時「詩は既に私の心の中に出來上つて居た。」と彼はその序文のなかで言つて居る。

この彼自身の言葉が示すように、「葦毛の種馬」は現代に取材したとはいふものゝ、全くの創作であつて、彼の眼に映つたいわゆる現代の生活が、彼の想像のなかで結晶したものにほかならない

The dog barked: then the woman stood in the doorway and hearing iron strike down the steep road Covered her head with a black shawl and entered the light rain: She stood at the turn of the road (The selected poems of Robinson Jeffers p. 141.)

冒頭の書き出しは極めて簡潔な筆緻ではじまり、ヒロイン California が登場する。彼女は氣高い姿をした女性で、顔は鈍重で淺黒いが、鼻梁は眞直で高く、眼は大きく、顎は長く唇は眞赤である。スコットランド人の水夫の落し子で四分の一だけインデヤンの血を享けている。

やがて蹄の音が近ずいて、古びた二輪馬車が彼女の夫ジョンをのせてやつて來る。後に二頭の馬を曳いて居る。それはジョンが賭博に勝つて仲間からせしめて來たものだ。彼はしたゝか酔つて居る。その手に入れた種馬が大變な自慢だ。「娘のクリスチナに何かクリスマスのプレゼントを買つて來たか？」という彼女の間にたいして「忘れた、クリスマスが來るのを娘に言ふな。」と答える彼。それにたいしてカリフォルニアは「妾はお前さんの負けた時にはいつもそのうめあわせになつて來た。二日もトムのものになつたこともあるし、幾日か饑をしのんだこともある。勝つたからにや是非クリスチナに何かクリスマスをさせなくちや。」と食い下つて、とゞのつまり娘のプレゼントのため十弗、彼のウイスキーを買うため二弗を彼から受けとる。

彼はオランダからの浮浪人で、七つになる娘のクリスチナは彼の種馬からは碧い眼を、彼自身からはしなびた額をうけついで居る。

其夜は嵐となつて、雨は岩にとどろく浪のように薄い屋根板の上に落ちる。雷鳴が谷間をわたつて行く。クリスチナは眠られぬ恐怖の一夜を過すが、父は嵐のとゞかぬ深い所に睡つて居る。

曙の一時間前、眼をさましたカリフォルニアは、牝馬に飼料をやるため素足で雨のなかに出て行く。僅かばかりしか残つて居ない大麥は、彼が眼をさましたら、昨日つれて來たあの種馬にみんなやつてしまふに違いないからだ。

一仕事をして歸つて來ると、床板の軋む音に彼が眼をさます。そして彼女を求める。彼女は娘えのプレゼントを買いに一日行程のモンテレーへ行くつもりなので一刻も早く出發したいのだが、彼が與えた金をとり戻すと嚇かすので、己むなく愛のない行爲に身をゆだねる。

漸く彼女が二輪馬車に乗つた頃は、夜は既に明け切つて、輝く灰色の雲が杉の森の彼方にひろがつて居た。冬の流れはわびしい音を立て、車輪は深い泥のなかに空轉した。

午前中雲は川のように北方に向つて流れて居たが、晝頃には次第に濃くなつて來た。彼女がモンテレーから家路に向つた時には水平に吹きつける風雨に直面しなければならなかつた。

このあたりまでの描寫は簡潔で、しかも迫力をもつて進められて居て、秀句はあるが部分的な引用は困難である。ホーレス・グレゴリも言うように、“It is almost impossible to quote Jeffers’

poetry successfully' (History of American poetry. 1900-1640. Harcourt, Brace and Company. 1946, p. 408) である。一行の佳句を引用することによつて彼の詩の迫力を伝えることは出来ない。

長い薄明の時間が續いたのち、途半ばにして急に夜の闇がやつて来る。

「クリスチナは眠つて居るだろう。クリスマスの晩だというのに、夜明け前のあの一時間が朝の時を無駄にしまつた！」

短かい彼女のひとりごとが人間の本能の世界の闇さを衝く。

何ものも見えぬ闇夜を行くうちに、小石に軋む車輪のひびきと、水を蹴散らす蹄の音によつて、河瀬にさしかゝつたことがわかつた。馬は鼻息荒く、水中に頸を漬けながら進む。

突然馬は停止した。早い流れのなかで。彼女はいら立つて鞭をふるおうとするが、はつとして思いとどまる。もしも、馬が跳ね上つたら、萬事はおしまいだ。水嵩は益々ふえて来るような気がする。「子供の玩具が水につかるかも知れぬ。」そういう思いが脳裡にひらめくと彼女は、水がぎんぎん流れ込むなかに突つ立ち、座席の隅にある彩色した木の鶏、羊毛でつくつた熊、繪本、菓子箱等を自分の服の下に入れ胸一杯に重ねて兩腕でかゝえた。固いボール箱の角が柔らかい彼女の傍腹の皮膚に食い込む。が一本の綱でぐるぐるとそれらをしつかり身体にゆわえつけた。馬はまだ夢見るものゝように水中に突立つて居る。

Then California

Reached out a hand over the stream and fingered her rump: the solid convexity of it. Shook like the beat of a great heart, "what are you waiting for?" But the feel of animal surface. Had wakened a dream, obscured real danger with a dream of danger. "What for? For the water-stallion. To break out of the stream, that is what the rump strains for, him to come up fring from sidewise. Fore-hooves in air, crush me and the rig and curl over his woman. (Ibid. p. 145)

切迫したリアリステックな描寫の極まるところにイリュウジョンが生れる。フロイドの精神分析の影響がこゝに見られる。オニールの *Desire under the Elms* (1925) シャウツド・アンダンスンの *Dark laughter* (1925) D. H. ローレンスの *Rainbow* (1915) *Fantasia and the unconscious* (1922) 等によつて既に文學の世界にとり入れられ始めていたこの方法は、チェフアズの作品でも可なり重要な役割を果している。

カリフォルニアはついに馬に鞭をあてる。危険の幻想が眞實の危険を忘れさせたのだ。馬は馳け出したが前方へは進まず、横さまに倒れて、淺瀬の方へもがきよつた。カリフォルニアは、本能的に座席横の鐵棒につかまつて難を避けたが、車から出て、馬をなだめ起し、再び深みの方に向はせる。馬は進みかけたが又しても立停つた。彼女はついに祈りをはじめる。いと子のため祈りの言葉をさゝける。その時さつと光閃がひらめいて、バラ色、金色、紫色の幕が水面を蔽つた。馬は怖え切つて又淺瀬の方に引き返した。彼女は、泣きながら車から下りて、水をふくんで重くなつた玩具の包紙をはぎ、ジョンのウイスキーの瓶と一緒にくゝりに包んで綱で背にゆわえつけ、馬を車から離してその上にまたがつた。

She drew up her shift about her waist and knotted it; naked thighs
Clutching the sides of mare, bare flesh to the wet withers and caught the mane with right hand
The loop-cap bridle-reigns in the other.

The mare snorted and reared; and roar and the thunder of invisible water:
The night shaking open like a flag, shot with flashes: the baby face hovering: the water.

Beating over her shoes and stocking up to the bare thighs and over them, like a beast
Lapping her belly: the wriggle and the pitch of the mare swimming: the drift, the sucking water: the blinding
Light above and behind with not a gleam before, in the throat of darkness... (Ibid. pp 146—147).

The night shaking open like a flag というメタファは巧みである。The baby face 今宵生れたキリストの顔、彼女は尙も幻影を見續けている。

The water beating over her shoes and stocking up the bare thighs and over them, like a beast
Lapping her belly の最後の一句も波頭の生動を寫して點睛のメタファである。ここに引用した部分は全篇のなかでも凄惨な描寫で、短綴の語のみを用いて緊迫のリズムをなしている。

こうして夜更けて家に着いたが、ジョンもクリスチナももう眠りについていたので、ただひとり幾時間も寝ずに水漬しになつた娘えのプレゼントを乾した。

第一のエピソードはこのようにして終る。ジョンのつれて來た葦毛の種馬に彼女ははじめから嫌悪を感じていたが、あるとき、クリスチナにクリスマスの夜のあの河中での祈りの話をして聞かせる。そしてクリスチナに「神様は赤ちやんなの？」と訊ねられて。「いえ神様の子供が赤ちやんなの。あの晩はお誕生日だつたんです。お母さんの名前はマリヤさま。神様がマリヤさまのところへ來たのです。だからキリスト様はお前や私のように人間の子ではないの。神さまがお父さんだつたんです。She was the stallion's wife—what did I say—God's wife。」Ibid. 148.)

彼女の心のなかでいつしか種馬が神となつているのである。神は彼女にとって、力であり恐怖であり、燃える火であるのだ。クリスチナに語る彼女の脳裡には、一木もない丘の上に赤葦毛のたてがみを旗のようにひるがえす種馬が浮んで來る。

そこへ又しても賭博に勝つたジョンが歸つて來て、いゝ機嫌でヒュマニテについてモノログをする。そこにジェファズの思想がはつきりと表現される。

Humanity is the mould to break away from

The crust to break through, the coal to break into fire the atom to be split..... (Ibid. 149.)

ジョンの言葉としてやゝ不釣合にも感ぜられるが、ジェファズはこゝで彼の思想を端的に語らうとしたのであろう。又一面この言葉はジョンの運命を暗示して居るとも考えられる。

その夜子供が睡つてしまうと彼女は夜の大氣のなかに出て、柵園いのところへ行く。煌々たる月光の下で、河中にキリストを見た幻影をふたゝび思い出し、丘の上を馬で走つて行つたら又神に會えるかも知れぬと思う。そして種馬に近ずき、裸馬にまたがつて丘上を疾驅させる。

このあたりの描寫も凄愴を極め、バイロンの mazzepa に於ける騎馬行を彷彿させるものがある。

明るる夜ジョンは又大酔して歸つてくる。そして彼女にもウイスキーをすすめるが、今宵彼女は一しほ彼に憎しみを感ぜ、彼に氣付かれぬ様こそつと戸外に抜け出る。間もなくそれと氣付いた彼は獵犬をつれて彼女のあとを追う。犬は吠えながら彼女を追うが、彼女は又しても柵園いのなかに入つてその中央に佇む。犬は種馬に吠えかかり、ジョンも柵園いを超えてなかに入る。

クリスチナは母親が家を出て行つた時、西の方から大洋が流溢して世界を蓋つてしまう夢を見て居たが、ふと眼をさまし、家のなかの空虚な氣配を感じ、戸外に出て見ると、月光が眞畫のように煌々としている柵園いのなかで、犬と種馬の争つているのがくつきりと見えた。更に母親の悲鳴も聞えて來たので、本能的に家の中から獵銃をとり出して母親のところに向けつる。母親はそれを受取つて犬を撃つ、種馬は已に襲いかゝるものが倒れたので、今度はジョンに向い、瞬時に蹄にかけて踏みこむ。齒をのぞいては形も残らぬほど無残に。

「母さん、撃つて、撃つて！」と叫ぶ娘の聲も耳に入らず、ガルフオルニヤは種馬の所業を

見まもつていたが、やがて馬が、人間、否今は月光下の汚點に過ぎぬものにたいする憎惡、侮蔑をほしいまゝにするさまを見て、憤然と人間にたいする忠節を感じて、獵銃をとり上げ續げさまに三發、種馬を射殺する。

She turned then on her little daughter the mask of a woman who has killed the God.

The night wind veering, the smell of the split wine drifted down hill from the house. (Ibid. 157.)

最終の二行はかく畢つて居る。この最後の場面は非常に象徴的であつて、種馬は彼女にとつて神であるように、ジェフアズにとつても神である。彼の神はエホバに通ずるもので、人間の味方ではない。この物語に破壊の任務を果たすものに過ぎない。力と優越の象徴であるのだ。そのことを彼は他の詩篇でも繰返しはつきりと表現している。

Yourself, if you had not encountered and loved our unkindly all but inhuman God
who is beautiful and too secure to want worshippers

And includes indeed the sheep with the wolves

You too might have been looking for a church. (Intellectuals) (Ibid. 458.)

「葦毛の種馬」の構成は極めて緊密であつて、いくつかのエピソードは、切り離すことの出来ぬように深く結び合わされて居る。そのために私は梗概を語るのに長すぎるのを思いつゝも尙、いくつかのポイントを逸し去つたことを怖れる。けだし精巧に組み合わせられた鎖の一環を欠く時、全体のつながりが傷られるからである。

ジェフアズ思想については人の批判はさまざまであろうが、彼の藝術——その冷たく澄んだ美しさ、その激しい迫力——について異論を立てる人はそう多くないであろう。エリオットがシエリの詩について言つたように「私は詩を読もうと思つて彼の詩集をひもとく事は決してない……私は彼の思想に嫌惡の念を感じる」(The use of poetry and the use of criticism. Faber and Faber Limited.

1934. p. 89) と彼の詩について語る人は少いであろう。それはエリオットが更に續けて言うように「詩のなかに表現された主義、理論、信念、又は人生觀が、讀者にとつて、首尾一貫したもの、成熟したもの、經驗に基ずいたものと受け入れられる限り、それに讃成であるか不讃成であるかは、詩を味わう上に何ら障害となるものではない。」(Ibid. p.96) からである。

ジェフアズの誠實さについては吾々は既に承知して居る。鷹と蒼鷺とを愛するこの孤高の詩人をアメリカ人が高く評價するのは充分の理由があると思う。

Olsen, E. G. : School and Community. X+422. New York, Prentice-Hall, Inc. 1945.

著者 Olsen 氏はワシントン州教育局學校社會關係行政委員で、學校を通しての地域社會の研究と奉仕への理論方法及實際の諸問題等の解明即 (1) 地域社會教育活動の簡潔な權威ある概観 (2) 大地域社會の分拆、研究及實際に有效な奉仕技術等の詳細な記述 (3) この意味の一般諸問題に成功的に試みられた助言の數々等を提供する、意圖を持って書かれたもの、地域社會學校が高唱される今日適切な參考文獻、目次 I 生き教育に對し (1) 吾々の學校の對生活關係 (2) 基礎とゴール II 地域社會の充分な理解 (3) 地域社會分拆技術 III 學校社會間の十稿 (4) 文書資料 (5) 視聽覺補助 (6) 専門家招聘 (7) 面接 (8) 現場旅行 (9) 調査 (10) 擴展現場學習 (11) 學校キャンプ (12) 奉仕作業 (13) 作業經驗 III 當面する諸問題 (14) プログラム計畫 (15) 行政的關心 (16) 評價 (17) 公的關係 (18) 地域社會奉仕の中心 (19) 地域社會整合 (20) 教師教育 V 基礎的原理 (21) 十の道標。索引。(清水正男)